転びイルマン　不干ハビアン

——慶長のジャーナリスト——

小島幸枝　著

書籍名	校正	入校日	出校日
[redacted]	初校	2011/12/12	2011/12/13

版元：武蔵野書院

目次

序章　5

第一部『ヘイケの物語』　11

一　ワリニヤノ上陸　13

二　信長　34

三　高槻のセミナリヨ　63

四　臼杵の修練院（ノビシアド）　80

五　加津佐会議　94

六『ヘイケの物語』　104

第二部　都の幻想　119

一　マルチンス司教　121

二　セルケイラ司教　137

書籍名	校正	入校日	出校日
[redacted]	初校	2011/12/12	2011/12/13

版元：武蔵野書院

三　ミヤコのハビアン……146
四　神父スピノラ……162
五　『妙貞問答』……177
六　林道春との論争……208
第三部　奇瑞見ず候……231
一　逃避行……233
二　三脚五徳……246
三　伴天連追放令……266
四　転びバテレン沢野忠庵……281
五　尾張の花正にて……303
六　『破提宇子』――奇瑞見ず候――……313
あとがき……339
参考文献……344

序　章

安土桃山時代。キリスト教に出会ったとき、ハビアンは一九歳になっていた。

イエズス会のルイス・フロイス（以下、フロイスとする）神父の1584.1.2（天正一一年一一月三〇日）付、ローマの総会長あて書簡[1]には、摂津国・高槻のセミナリヨの七、八人の新入生の一人として、かれについての記述が見られる。

「その者は仏教の小さな寺院とその収入をもっていたが、偶然、教会とセミナリヨを見物にきて、説教を聴き、直ちに受洗の決心をしただけでなく、その収入と小寺院を棄てて教会に入る決心をなし、これを実行した」と。

一五八七年のイエズス会年報によれば、のちに北政所（秀吉の本妻ねね）の侍女になったかれの母も、このとき共に洗礼を受けてジョアンナと称したらしい[2]。

いま、フロイスの言葉を信ずるとして、このときかれは、説教を聴いただけで、なぜ「直ちに」キリスト教の洗礼を受けようと思い、しかも「教会に入る」（修道士になる）決心をしたのであろうか。かれに、この唐突とも見える行動をとらせたものは何だったのだろう。フロイスは、「我等の主デウスに動かされて」と記している。しかし、かれの行跡を辿ってみるとき、私はあるこだわりを抱かずにはいられない。

中世以来の武士階級の隆盛とかかわり、戦国武家の世界観と美意識に君臨していた禅宗門に籍を置き、小さいながらも「自分の寺」を持ち、収入を得ていた青年僧が、これからというときにその寺を棄て、異教・キリスト教に身を委ねるとは。かれは結局、そのせっかくの異教ともまた、訣別するのである。この若き日の第一回目の翻意の動機と心の襞（ひだ）とを問いつめていけば、もしかしたら、壮年になっての第二回目の翻意、あるいは日本的マインドへの決定

書籍名	校正	入校日	出校日
[redacted]	初校	2011/12/12	2011/12/13

版元：武蔵野書院

的な回帰、または原型的日本人への回流に対して、私なりの答えが得られはしないだろうか。

天正一〇（1582）年に、肥前国・有馬のセミナリヨ生から選ばれた四人の少年が、使節として巡察師アレシャンドロ・ワリニヤノ神父（以下、ワリニヤノとする）と共にローマに向けて長崎を出航した。その四ヵ月後には、「夢まぼろし」のごとく、無情な本能寺の変が起きる。

周知のように、この三、四年間、先見性ゆたかな日本近世の構築者で、天才的な狡智と武略を備えた信長の天下制覇の事業は、着々と手が打たれ、成功裡に実行されていた。この天正一〇年には、一気に東国へ突破作戦を急行した信長と長男・信忠の攻撃で、東国武将の雄・信玄の長男・武田勝頼が、なすすべもなく三七歳で自害し、武田氏が滅亡している。西の毛利氏討伐に遠征していた秀吉（羽柴筑前守）の求めに応じ信長もみずから援兵に乗り出そうとした矢先に、反逆は起きた。「運は天にあり」と近世武人・天下人の野望を思い切りよく発揮していた信長の、思いもよらぬ蹉きであった。

この機をのがさず、秀吉は一躍、歴史の表舞台に躍り出る。

彼は賤ヵ岳の合戦で先輩老臣の柴田勝家を滅ぼし、彼に反抗した信長の第三子・信孝を自刃に追い込み、ついに天正一一年秋、大坂に築城の鍬を入れる。それは信長が焼討ちにした中世民衆信仰の一向宗門徒の石山本願寺の広大な跡地であった。主君・信長の華麗、雄大な安土城を凌駕しようとの秀吉の野望を、イエズス会年報は読みとっている。[3] そのときまで安土のセミナリヨの校長をつとめていたオルガンチノ神父は、高山右近の斡旋によって秀吉に謁見、大坂の城付近の丘陵地が教会敷地として与えられる。このころ日本におけるキリシタン教会は、大小合わせて約二〇〇、キリシタンはすでに一五万人を数えたという。イエズス会士は八四、五名。うち、二〇名を日本人修道士が占めていた。[4] 日本イエズス会にとって宣教活動の上り坂の時期であった。

ヨーロッパに目を向ければ、一五八一年にネーデルランドが反乱をおこし、オランダが独立宣言をする。翌八二年

はローマ教皇グレゴリオ十三世が、それまでのユリウス暦を改正した。これよりカトリック諸国はグレゴリオ暦に基づくこととなる。翌八三年にはガリレイが振子の等時性を発見する。

世界史的な大状況は、神秘と秩序の中世から、混濁と新生の近世へと、歩を進めていた。

文芸復興のルネサンス、西洋で火蓋を切り、東洋に波及してきた大航海時代、宗教改革、農民戦争、絶対王政が継起的に人類史に飛躍と混迷、栄光と暗部の華麗な絵巻を展開しつつあった。

信長の突然の死で、安土の城と町は、いきなり主君のいない虚構の街に化した。開明的な信長の庇護を受けていたキリシタンの身辺に思わぬ危機が突然に発生したのである。

安土にあったセミナリヨと宣教師たちは、ミヤコを経、高山右近の申し出を受けて高槻へと移動する。ハビアンは、ここでセミナリヨ生として受け入れられた。前掲書簡でフロイスは、かれを「大いに才能あり進歩を示している」と紹介している。しかしその後のかれはイエズス会を出奔し、キリスト教を告発する挙に出たため、同会員名簿から抹消される。そのかれが、幕末明治期に、排外・邪教観と国権主義の興隆の渦中で新生する。当時よく読まれた排耶書の中に、反キリスト教の中心人物として復活したのである。キリスト教会からみれば、いわば落ちこぼれ、イエズス会にとっては反逆児である。この大きな落差。

いったいかれの人生にどんなことが起きたというのか。かれの行動を支えていたのは何であったろうか。一九歳で禅林をあとにして、キリスト教の洗礼を受け、四〇代で修道女を同伴しての逃避行。その晩年は迫害者である徳川幕府の手先となって、キリスト教会を内部告発する、もと修道士の屈折した精神遍歴。一七世紀以来本名も出自も、禅僧名さえも忘失され、キリスト教を棄てたあとまで、クリスチャン・ネーム「ハビアン」としか名前の残存しない男の右往左往の足跡（そくせき）。いかにも日本民族共同体内の知識人らしいブーメラン現象の人生を、完璧にみずからの居直りで描ききった典型像。日本文化と西洋文明の嵐の中を駆け抜けた「時代の子」の活躍、そしてかれを襲った苦悩と働

書籍名	校正	入校日	出校日
[redacted]	初校	2011/12/12	2011/12/13

版元：武蔵野書院

哭、これがかれだけの特殊な事例であったのか、それとも日本人全体に共通するものなのだろうか。

かれの心性と時代環境を、いわゆる「日本教」[5]の立場からでなく、実事求是の精神を――幸いに、かれはキリスト教内外にあって三冊の編著書『ヘイケの物語』『妙貞問答』『破提宇子』を残した。この中にその謎を解く鍵があると私は見ている――忠実に追ってみることによって、日本および日本人の深淵と実像に迫ってみようと思う。

注

（1）『イエズス会日本年報』上（新異国叢書 3 雄松堂書店刊 1969）（文献1とする）、チースリク（以下、チースリクとする）「高槻のセミナリヨ」（「キリシタン文化研究会会報」16-3,4 キリシタン文化研究会編 1974.6）（文献2とする）

（2）チースリク「ファビアン不干伝ノート」（「キリシタン文化研究会会報」15-3 キリシタン文化研究会編 1972.12）（文献3とする）、文献2。J・ラウレス『キリシタン文庫』、シュッテ（カタログ）。なお、「文献2」では、ハビアンの母を「マダレナ」とするが、「文献3」では「ジョアンナ」とされている。「ジョアンナ」の方が正しいようだ。

（3）文献1所収（1584.1.2（天正一一年一一月三〇日）付、フロイスよりイエズス会総長宛書簡）

（4）ワリニヤノ著、松田毅一他訳『日本巡察記』（東洋文庫229 平凡社刊 1973.3）（文献4とする）、文献1（1583年付録 二、1583.12.17（天正一一年一一月一四日付、インド管区長A・ヴァリニャーノよりゴア発、エボラの大司教ブラガンサ宛書簡）

（5）いわゆる「日本教」とは、二〇世紀後半以来、一世を風靡したイザヤ・ベンダサン氏や山本七平氏らのハビアン＝日本知識人の原型論に発する。伝統的民族精神の神仏儒の三教も、キリスト教も、東西のどんな文化も学芸もすべて飲み込み吸収し、身につけてしまう溶解剤を常備している日本人と日本文化への居直り的な弁明論の一形態なのであろう。作家・遠藤周作氏のキリシタン物、とくに名作『沈黙』（映画化もされオペラ化もされた）のテーマと登場人物群が、

文学作品上の質のことはともかく、やはり「日本教論」に同調する雰囲気を持っているといえよう。篠田正浩監督の映画はそれをさらに増幅した「日本美意識」を華麗に見せて、現代日本人を魅了した。

信仰の内奥にわけ入り、宗教の実相に深く連関することを嫌う日本人の性情は、唯一絶対神信仰のキリスト教についての「理解」が浅いために、宗教を現世利益の方便や祝儀不祝儀、あるいは精神修養または人格向上の教訓と思い込みがちである。その意味でも不屈な殉教者や外国人宣教師を異質視する傾向がいつまでも拭い去れない。なかでも一六〇〇年前後の三〇年間と昭和一五年の戦時下（1940-45）は、その突出期間であった。「日本教」論議は、この二つの時期の異教差別と弾圧のすさまじい事実を、国民全体の視座からも忘却し免罪にする便法としても好都合であったといえるであろう。

書籍名	校正	入校日	出校日
[redacted]	初校	2011/12/12	2011/12/13

版元：武蔵野書院